

～毎年 10 月 18 日は“冷凍食品の日”※1～

日本全国の 25 歳以上の既婚女性 500 人※2に聞く

“冷凍食品の利用状況”と“食の安全”意識実態調査結果について

冷凍食品は弁当のほか、家庭内の食事利用が増加！

食について一番信頼できるのは“自分の確認”(77%)、メディア・行政は低い信頼

◎ 主婦の冷凍食品の利用頻度はかなり回復

- 平均利用回数は「2.0回/週」
- 2人に1人近く(44%)が冷凍食品を週2～3回以上も利用
- 冷凍食品のヘビーユーザーが復調の兆し

◎ 冷凍食品は「弁当の利用」(52%)が多いが、家庭内の食事でも利用

- 「料理に使う素材として」(52%)、「自宅で食べる昼ごはんとして」(32%)が大幅に増加

◎ 冷凍食品の購入には、「原料原産地の表示」を重視(87%)、中国産への忌避意識がやや低下

- 産地などを重視するとともに、「信頼できるメーカー」(86%)も重視
- 「価格の安さ」を重視(67%)する傾向も若い世代を中心にやや強まる

◎ 『食の不安』第1位は「農薬」(85%)、「食品の偽装」(80%)など

- 以下、「魚介類の水銀汚染」(75%)、「BSE(狂牛病)」(74%)など、見えないものへの不安が上位
- それらの要因に対して何らかに対応している主婦は 2～4 割程度で、深刻に考えている人は多くない

◎ 「食の品質・安全」における信頼保証 第1位は「自分の確認」(77%) メディア(18%)や行政(28%)は低い信頼

- 「生産者」(60%)、「メーカー」(58%)は比較的高い信頼

※1 “冷凍食品の日”

10 月は食欲の秋であり、冷凍(レイトー)のトーにつながることで、冷凍食品の世界共通の管理温度マイナス 18℃から 10 月 18 日を冷凍食品の日と決めました。

<調査概要>

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 【調査方法】 | インターネット調査 |
| 【調査対象※2】 | 冷凍食品を「月1回以上」利用している25歳以上の既婚女性500人 |
| 【調査期間】 | 2009年8月18日～8月20日 |

目次

- 調査の趣旨と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P1
- 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P2
- 1. 冷凍食品を利用する頻度・・・・・・・・・・・・・・・・ P3
- 2. 冷凍食品の購入目的・・・・・・・・・・・・・・・・ P5
- 3. 冷凍食品を購入する際に重視すること・・・・・・・・ P7
- 4. 不安を感じるのは、食品や食生活のどんな問題か・・・・・・・・ P9
- 5. 実際に、利用を減らしたり、避けたり、表示などで確認していること・・・・・・・ P10
- 6. 品質・安全について、どこからの保証を信頼しているか・・・・・・・ P12

調査の趣旨と目的

社団法人日本冷凍食品協会(会長 浦野光人)はこのほど、冷凍食品の利用者を対象に、冷凍食品の利用状況や食品の安全に関する意識を明らかにするため、『冷凍食品の利用状況」と“食の安全”意識実態調査』を実施しました。

この調査は、日常生活の中で冷凍食品が身近な存在である25歳以上の既婚女性が、冷凍食品を普段どのように利用しているのか、また、冷凍食品を含め、食品全般の安全性に関してどのような意識を持っているのかについて探り、その声を聞き集計したものです。

当協会では、冷凍食品を通じて食文化・食生活の向上を図ることを目的に、冷凍食品の利用法だけでなく、品質、技術、安全性などの広報・啓発活動を様々な形で行っているほか、“中国食品安全法”の解説セミナーや誤解されがちな“農薬・食品添加物の安全性”について特集した食品安全ハンドブックを作成するなど、食全般に共通する啓発活動にも注力しています。

こうした活動の一環として、このほど、「冷凍食品」及び「食の安全」に関する消費者の意識について調査を実施しました。概要は次の通りです。

● 今回の調査の結果、総じて冷凍食品の利用頻度が高まっていることが分かりました（「週2回～3回以上利用する人」は全体の44.4%）。昨年の中国天洋食品事件以前並みの頻度に回復しています（「週2～3回」（31.4%）が大幅に増加）。また、購入目的は、「お弁当のおかずとして」（52.6%）が依然として多いものの、「料理に使う素材」（52.8%）としてや、「自宅で食べる昼ごはんとして」（32.4%）などが増えており、家庭での食事の一部としてかなり浸透してきているようです。

注：前回（2008年11月）以前の調査の対象者は、『「中国製冷凍餃子による毒物中毒事案」を認知しており、中国製冷凍餃子による毒物中毒事案以前、普段（月1回以上）冷凍食品を使っていた既婚女性（25歳以上）』なので、調査時点において「全く使わない」という人も含まれています。

● 冷凍食品を購入する際に重視することとしては、「原材料産地の表示がしてあること」（87.6%）、「信頼できるメーカーであること」（86.0%）、「製造工場が国内であること」（83.6%）、「原料が国内産であること」（80.8%）が上位となっており、近年の食品をめぐる事件の影響が現れています。一方、中国産を忌避する意識もやや薄れているほか、「価格の安さ」を重視する割合もやや高まっており、特に若い年齢層では「価格の安さ」に強い魅力を感じていることがうかがえます。

● 冷凍食品に限らず、食品全般について“食の安全性”に関しての調査を行いました。日常生活で、食品や食生活のどのような問題に不安を感じるか聞いたところ、「農薬」（85.5%）や「食品偽装」（80.1%）、「魚介類の水銀汚染」（75.7%）、「BSE」（74.6%）などが上位となりました。また、現実には食中毒の被害が最も大きいものの、目に見えないものに対する漠とした不安が根強いようです。

● “食の安全性”に関する不安要因を受けて、実際に利用を減らしたり、避けたり、あるいは購入の際に表示などを確認しているものについては、「遺伝子組み換え作物」（54.1%）が最も多く、次いで「農薬」（46.3%）、「食品添加物」（46.1%）となりました。「不安に感じている人」のうち、利用を減らしたり、避けたり、表示などで確認している人の割合（不安防衛度）は、「遺伝子組み換え作物」（66.7%）と「食品添加物」（55.2%）が高率ですが、不安を感じながらも何も対処をしていないという人も少なくないことが分かりました。“食の不安”には科学的な根拠ではなくイメージが先行しており、本当に自己防衛が出来るのか、その必要があるのかなども含めて今後も一層の啓発活動が必要であることが分かりました。

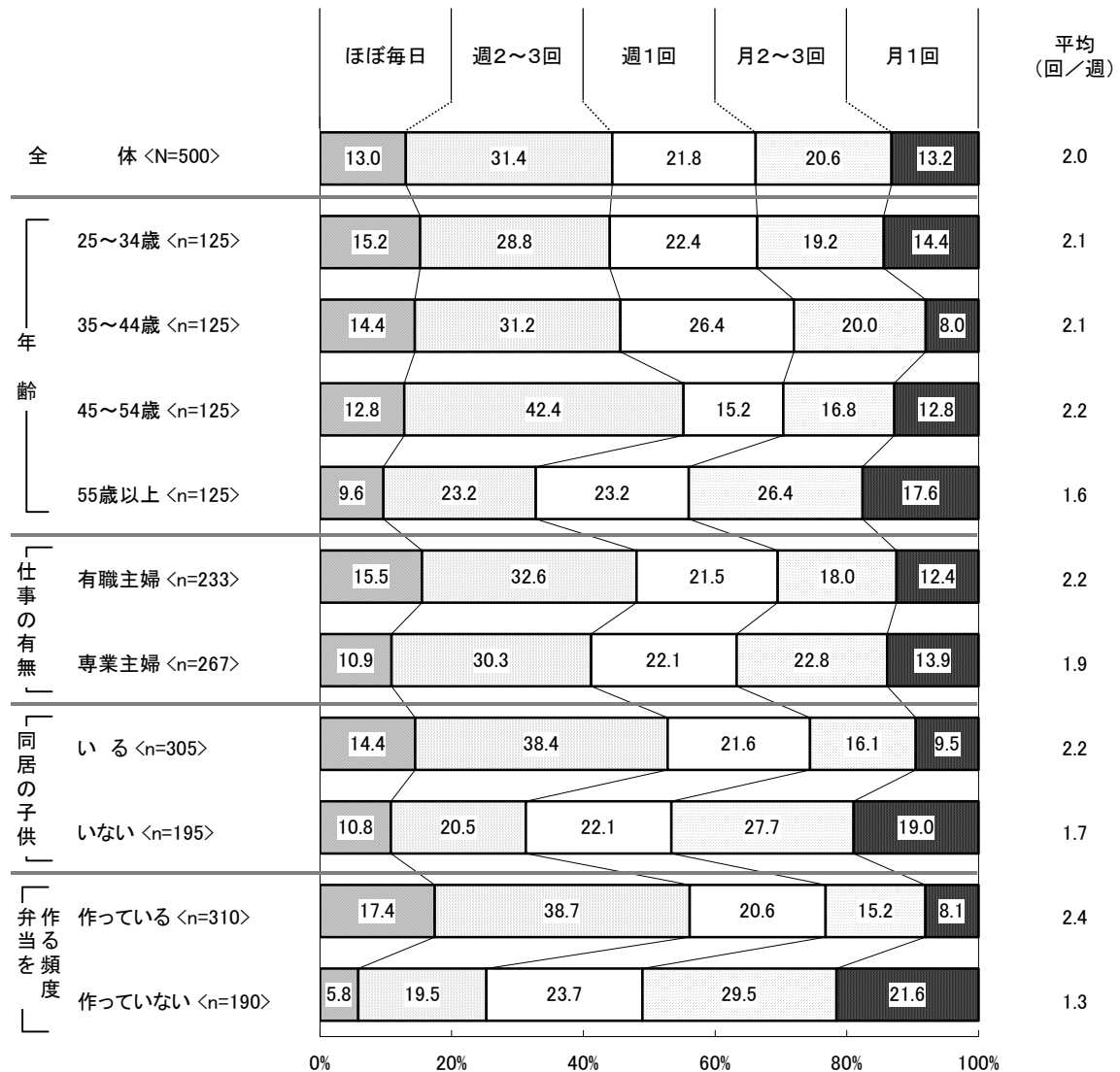
● 食品全般の品質・安全について、どこからの保証に信頼を寄せているかを調査したところ、信頼している割合が最も高かったのは、「自分の目と舌で確かめて」（77.2%）以下、「生産者」（60.0%）、「家族・友人・知人の口コミ」（58.6%）となりました。やはり、“食の安全性”の判断については、消費者自身の意識が大きく影響していることが分かります。一方で、消費者が最も情報を得ているメディアやインターネットに対しては、信頼度が低く、行政に対しても不信感が高いようです。

1. 冷凍食品を利用する頻度

「週2～3回」(31.4%)が最も多く、平均利用回数は「2.0回/週」

●お弁当を《作っている》(2.4回/週)の方が《作っていない》(1.3回/週)人より約1回多い

図 1. 冷凍食品を利用する頻度



冷凍食品を利用する頻度を聞いたところ、「週2～3回」(31.4%)が最も多く、次いで「週1回」(21.8%)、「月2～3回」(20.6%)が続き、平均は「2.0回/週」です。

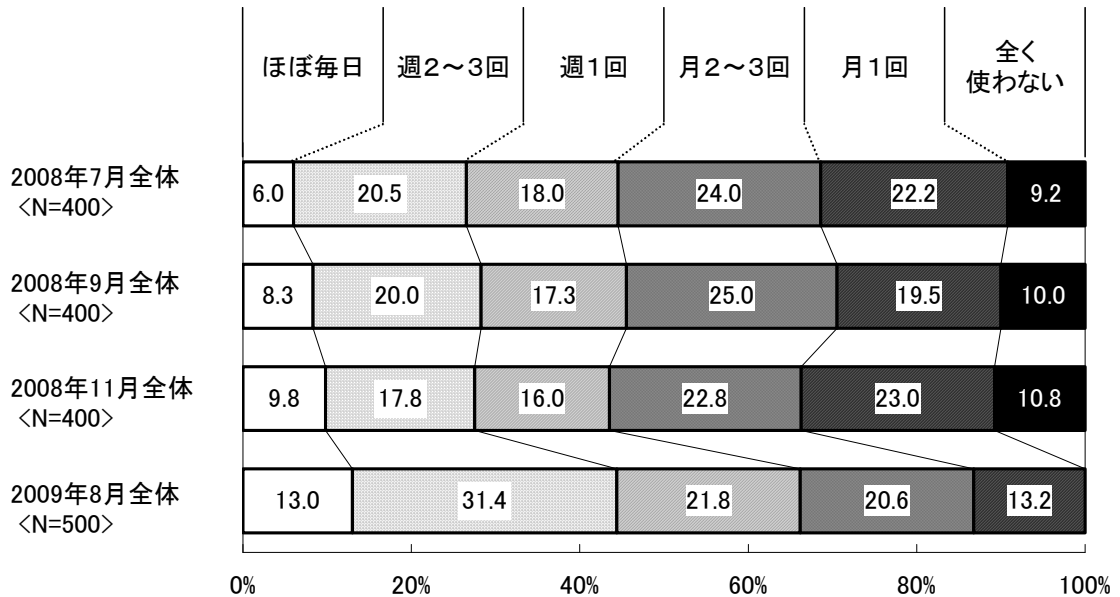
年齢別でみると、平均は《45～54歳》(2.2回/週)が若い層より若干多く、《55歳以上》(1.6回/週)になると他の年齢に比べて約0.5回少なくなります。

仕事の有無別でみると、平均は《有職主婦》(2.2回/週)の方が《専業主婦》(1.9回/週)よりもやや多めです。

同居の子供の有無別では、同居の子供が《いる》人は「週2～3回」(いる38.4%、いない20.5%)が4割弱を占めており、平均も《いる》(2.2回/週)の方が《いない》(1.7回/週)人よりも多くなっています。

弁当を作る・作らない別で見ると、弁当を《作っている》人は「ほぼ毎日」（17.4%）、「週2～3回」（38.7%）の割合が、《作っていない》（順に5.8%、19.5%）人に比べて高く、平均も《作っている》（2.4回/週）の方が《作っていない》（1.3回/週）人より約1回多くなっています。

図 2. 冷凍食品を利用する頻度 [時系列]



●前回までの調査結果と比較すると、事件以前並み、あるいは事件以前以上の頻度まで回復しており、「週2～3回」（31.4%）が大幅に増加しています。

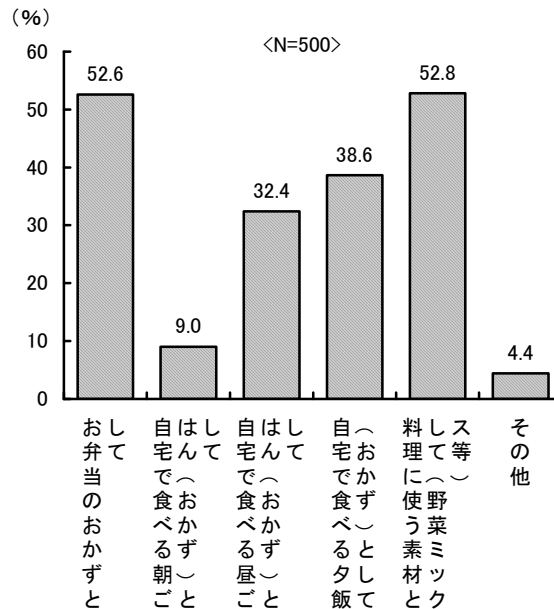
注：前回（2008年11月）以前の調査の対象者は、『「中国製冷凍餃子による毒物中毒事案」を認知しており、中国製冷凍餃子による毒物中毒事案以前、普段（月1回以上）冷凍食品を使っていた既婚女性（25歳以上）』なので、調査時点において「全く使わない」という人も含まれています。

2. 冷凍食品の購入目的

「料理に使う素材として(野菜ミックス等)」(52.8%)、「お弁当のおかずとして」(52.6%)がいずれも半数強

●お弁当を《作っている》人の8割近くが「お弁当のおかずとして」(79.4%)冷凍食品を利用

図 1. 冷凍食品の購入目的 (MA)



年 齢	25～34歳 <n=125>	57.6	4.8	29.6	31.2	49.6	5.6
	35～44歳 <n=125>	62.4	12.8	28.8	38.4	47.2	3.2
	45～54歳 <n=125>	58.4	10.4	35.2	47.2	59.2	4.8
	55歳以上 <n=125>	32.0	8.0	36.0	37.6	55.2	4.0
仕事の有無	有職主婦 <n=233>	60.1	10.3	27.5	35.2	50.2	4.3
	専業主婦 <n=267>	46.1	7.9	36.7	41.6	55.1	4.5
同居の子供	いる <n=305>	62.3	11.8	34.4	39.3	56.4	3.3
	いない <n=195>	37.4	4.6	29.2	37.4	47.2	6.2
弁当を作る頻度	作っている <n=310>	79.4	9.7	28.1	29.0	51.6	4.5
	作っていない <n=190>	8.9	7.9	39.5	54.2	54.7	4.2

冷凍食品をどのような目的で購入しているか尋ねたところ、「料理に使う素材として(野菜ミックス等)」(52.8%)、「お弁当のおかずとして」(52.6%)がいずれも半数強と多くなっています。次いで「自宅で食べる夕食(おかず)として」(38.6%)、「自宅で食べる昼ごはん(おかず)として」(32.4%)が多くなっており、朝食・昼食・夕食を問わず「自宅で食べるごはん(おかず)として」利用している人は約6割(58.6%)にものぼります。

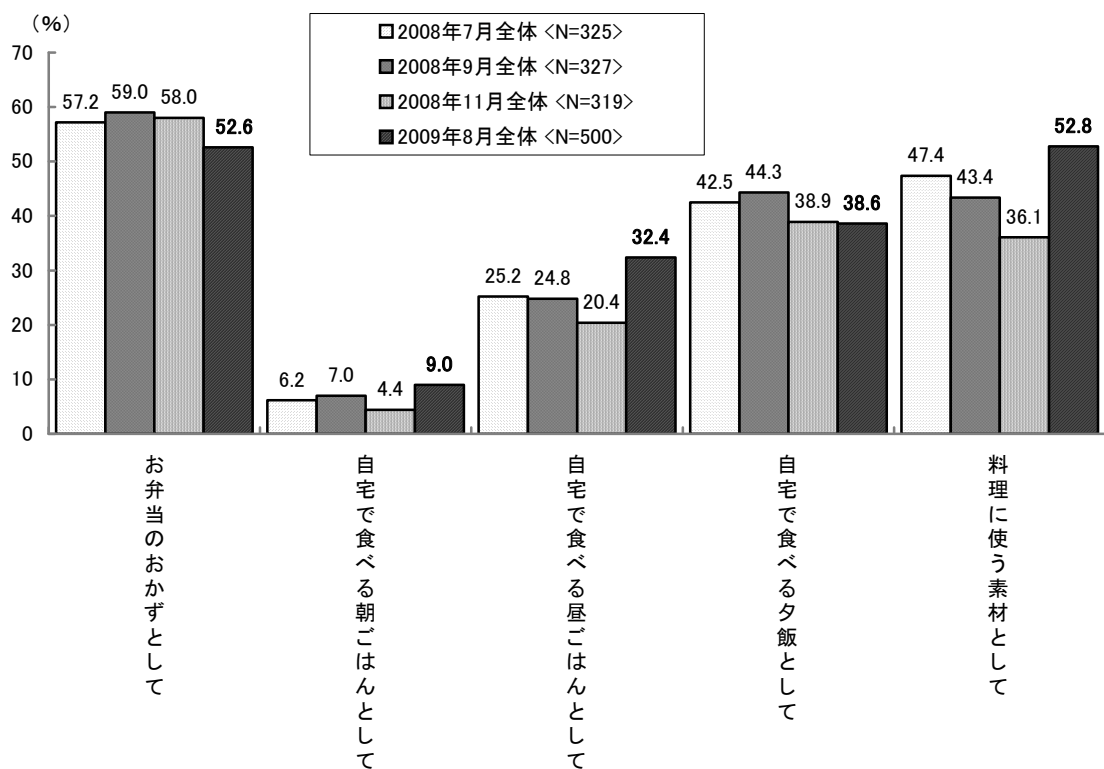
年齢別でみると、《55歳以上》は「お弁当のおかずとして」(32.0%)が他の年齢(25～34歳57.6%、35～44歳62.4%、45～54歳58.4%)に比べて低くなっています。これは、《55歳以上》では弁当を作っている割合が4割弱(37.6%)と、他の年齢の7割前後に比べてかなり低くなっているからでしょう。一方《25～34歳》では、“自宅で食べるごはん(おかず)として”(25～34歳47.2%、35～44歳59.2%、45～54歳64.8%、55歳以上63.2%)が比較的低率です。

仕事の有無別でみると、《有職主婦》は「お弁当のおかずとして」（有職主婦60.1%、専業主婦46.1%）、《専業主婦》は「自宅で食べる昼ごはん（おかず）として」（同27.5%、36.7%）が高くなっています。

同居の子供の有無別では、総じて《いる》人の方が高い項目が多く、冷凍食品を幅広く利用していますが、中でも「お弁当のおかずとして」（いる62.3%、いない37.4%）は20ポイント以上高率です。

弁当を作る・作らない別でみると、《作っている》人の8割近くが「お弁当のおかずとして」（79.4%）をあげており、やはり冷凍食品はお弁当作りの強い味方ようです。一方、《作っていない》人は「自宅で食べる夕飯（おかず）として」（54.2%）が《作っている》（29.0%）人に比べて多くなっています。

図 2. 冷凍食品の購入目的（MA）[時系列]

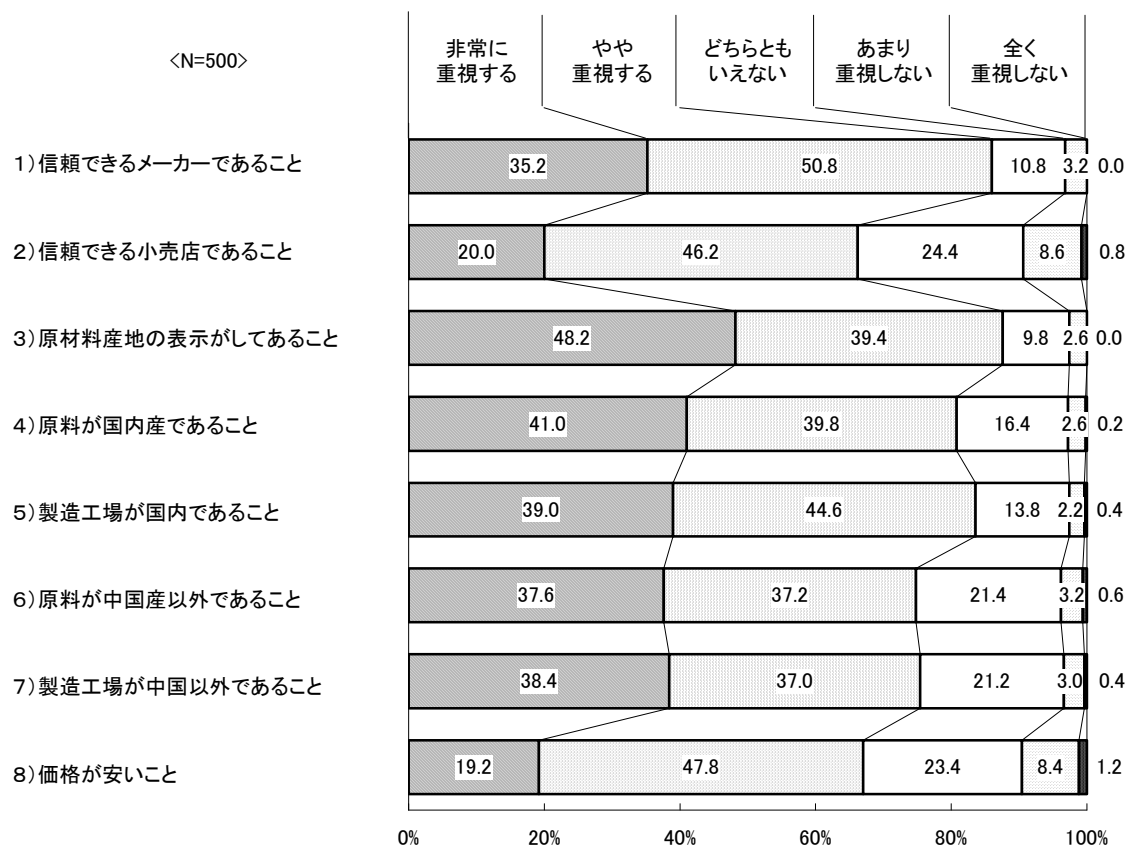


●前回までの調査結果と比較すると、「料理に使う素材として」「自宅で食べる昼ごはんとして」が大幅に回復していますが、「お弁当のおかずとして」「自宅で食べる夕飯として」は若干低下しています。

3. 冷凍食品を購入する際に重視すること

8割以上の方が「原材料産地の表示がしてあること」(87.6%)、「信頼できるメーカーであること」(86.0%)、「製造工場が国内であること」(83.6%)、「原料が国内産であること」(80.8%)を“重視している”

図 1. 冷凍食品を購入する際に各項目をどの程度重視しているか



冷凍食品を購入する際、どのようなことを重視しているかをみると、“重視する（非常に＋やや）”の割合は、『原材料産地の表示がしてあること』（87.6%）、『信頼できるメーカーであること』（86.0%）、『製造工場が国内であること』（83.6%）、『原料が国内産であること』（80.8%）の4項目がいずれも8割以上と高く、産地やメーカーの信頼性が重要視されています。また、『製造工場が中国以外であること』（75.4%）、『原料が中国産以外であること』（74.8%）が7割台で続き、中国産の食品に対する不信感は根強いことがうかがえます。

表 1. 冷凍食品を購入する際に各項目をどの程度重視しているか <「重視する（非常に+やや）」の割合・年齢別>

		(%)								
	サンプル数	信頼できるメーカー	信頼できる小売店	表示がしている原材料産地	原料が国内産であること	製造工場が国内にあること	原料が中国産以外であること	製造工場が中国以外にあること	価格が安いこと	
全	500	86.0	66.2	87.6	80.8	83.6	74.8	75.4	67.0	
年 齢	25～34歳	125	83.2	61.6	86.4	86.4	85.6	74.4	75.2	78.4
	35～44歳	125	84.8	66.4	86.4	81.6	84.0	76.8	74.4	70.4
	45～54歳	125	88.8	64.0	86.4	78.4	80.8	73.6	76.0	60.8
	55歳以上	125	87.2	72.8	91.2	76.8	84.0	74.4	76.0	58.4

年齢別に“重視する（非常に+やや）”の割合をみると、若い年齢ほど『原料が国内産であること』『価格が安いこと』を重視する人が多くなっています。また、年齢に関係なく 75%前後が『製造工場が中国以外であること』『原料が中国産以外であること』を重視しています。

同居の子供の有無別による大きな差はありませんが、《いる》人は『製造工場が国内であること』（41.0%）、『価格が安いこと』（21.0%）が《いない》（順に 35.9%、16.4%）人に比べてやや高率です。

弁当を作る・作らない別による差もあまりありませんが、《作っていない》人は「原料が国内産であること」（45.3%）、「信頼できる小売店であること」（23.7%）が《作っている》（順に 38.4%、17.7%）人に比べて高めです。

表 2. 冷凍食品を購入する際に各項目をどの程度重視しているか <「重視する（非常に+やや）」の割合> [時系列]

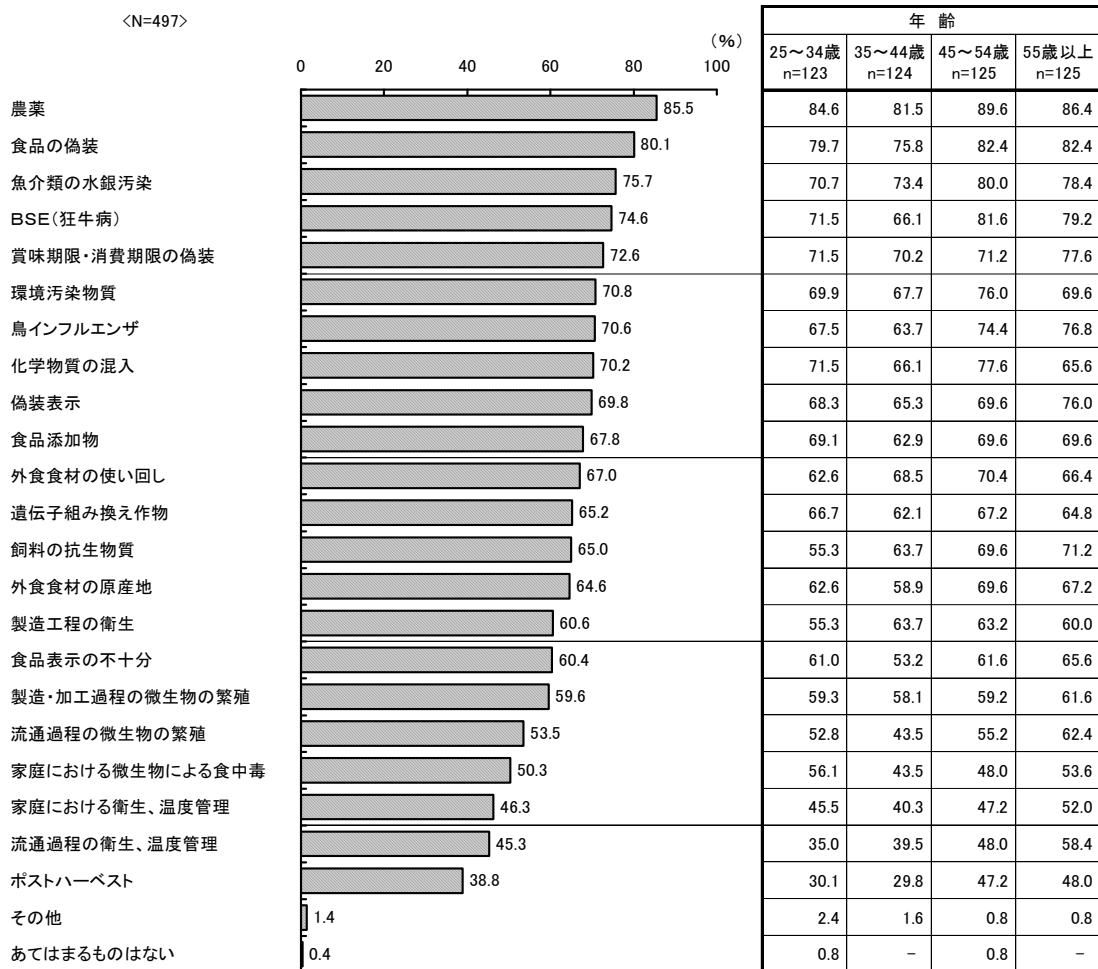
		(%)								
	サンプル数	信頼できるメーカー	信頼できる小売店	表示がしている原材料産地	原料が国内産であること	製造工場が国内にあること	原料が中国産以外であること	製造工場が中国以外にあること	価格が安いこと	
2009年	8月	86.0	66.2	87.6	80.8	83.6	74.8	75.4	67.0	
2008年	11月	87.5	69.5	93.1	87.5	87.4	77.5	78.4	65.8	
2008年	9月	89.9	73.4	91.1	85.3	86.0	78.9	77.0	67.5	
2008年	7月	91.7	73.5	91.1	85.2	84.0	80.4	79.7	62.4	

●前回までの調査結果と比較すると、『価格が安いこと』以外は前回調査に比べて低下しています。特に『原材料産地の表示がしていること』『原料が国内産であること』の低下が目につきます。

4. 不安を感じるのは、食品や食生活のどんな問題か

「農薬」(85.5%)、「食品の偽装」(80.1%)、「魚介類の水銀汚染」(75.7%)、「BSE(狂牛病)」(74.6%)、「賞味期限・消費期限の偽装」(72.6%)などが上位

図 1. 不安を感じるのは、食品や食生活のどんな問題か (MA)



日頃の食生活の中で、食品にどの程度不安を感じているかを尋ねたところ、「非常に不安」「やや不安」「あまり不安はない」と回答した人(497人)にのぼりました。さらに、不安を感じるのは食品や食生活のどんな問題かをあげてもらったところ、ほとんどの項目で半数を超えており、さまざまなことに不安を感じている人が多いことがわかります。中でも「農薬」(85.5%)が最も多く、次いで「食品の偽装」(80.1%)が続き、以下「魚介類の水銀汚染」(75.7%)、「BSE(狂牛病)」(74.6%)、「賞味期限・消費期限の偽装」(72.6%)、「環境汚染物質」(70.8%)、「鳥インフルエンザ」(70.6%)、「化学物質の混入」(70.2%)までが7割以上と高率です。

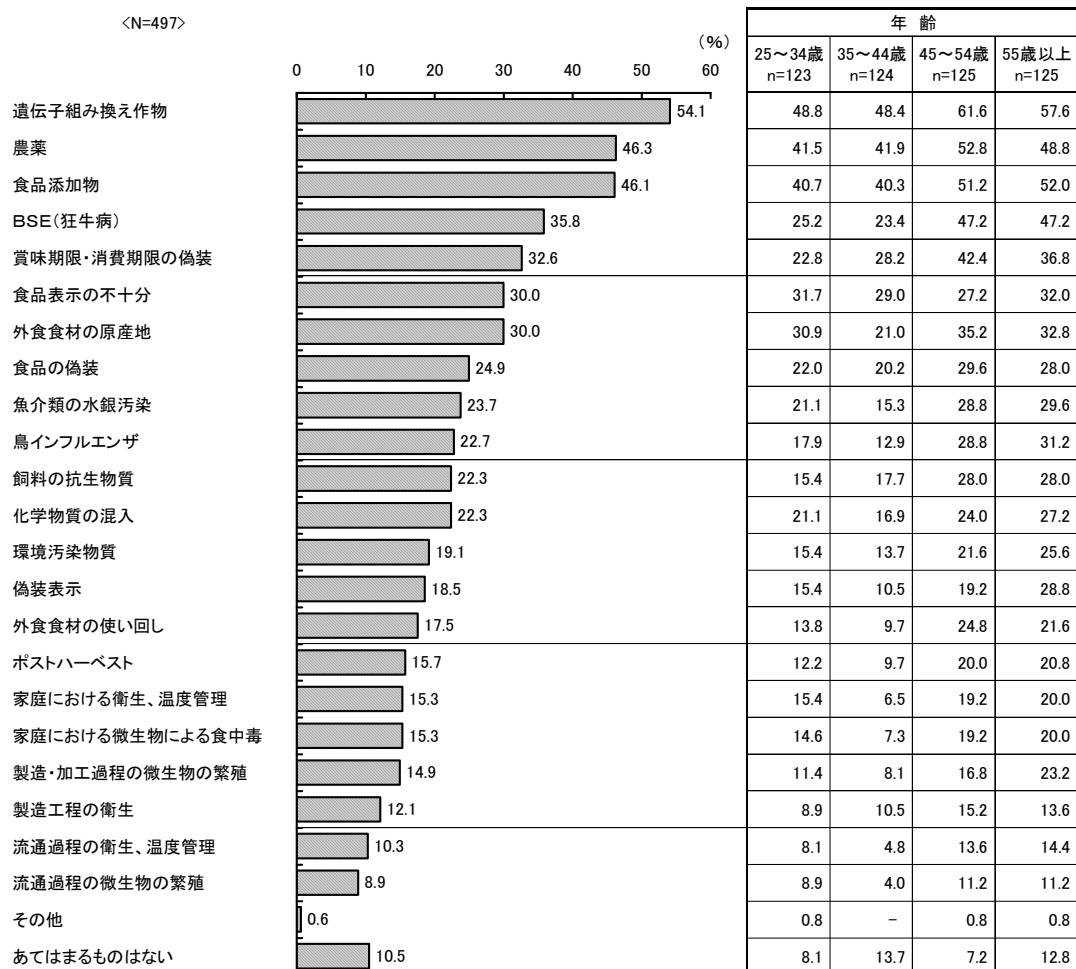
食卓にのぼるまでの過程別にみると、「農薬」「魚介類の水銀汚染」などを合わせた“原材料”(97.6%)、「食品の偽装」「賞味期限・消費期限の偽装」などの“製造・加工”(94.6%)、「外食食材の使い回し」などの“流通”(88.9%)過程についてはほとんどの人が不安を感じていますが、「家庭における微生物による食中毒」などの“調理・保存”(55.1%)は5割強と、他の過程に比べれば低くなっています。

年齢別でみると、「45～54歳」で高率の項目が多いほか、年齢が上の人ほど「魚介類の水銀汚染」「飼料の抗生物質」「流通過程の衛生、温度管理」「ポストハーベスト」などが高い傾向があります。

5. 実際に、利用を減らしたり、避けたり、表示などで確認していること

「遺伝子組み換え作物」(54.1%)が最も多く、次いで「農薬」(46.3%)、「食品添加物」(46.1%)などが続く

図 1. 実際に、利用を減らしたり、避けたり、表示などで確認していること (MA)



実際に利用を減らしたり、避けたり、表示やホームページなどで確認したりしているものをあげてもらったところ、「遺伝子組み換え作物」(54.1%)がトップ、次いで「農薬」(46.3%)、「食品添加物」(46.1%)が多くなっています。以下「BSE(狂牛病)」(35.8%)、「賞味期限・消費期限の偽装」(32.6%)、「食品表示の不十分」(30.0%)、「外食食材の原産地」(30.0%)などの順で、約9割が“ある”(89.5%)と回答しています。

年齢別でみると、全体的に45歳以上で高率な項目が多く、「遺伝子組み換え作物」(25～34歳48.8%、35～44歳48.4%、45～54歳61.6%、55歳以上57.6%)、「食品添加物」(同40.7%、40.3%、51.2%、52.0%)、「BSE(狂牛病)」(同25.2%、23.4%、47.2%、47.2%)、「賞味期限・消費期限の偽装」(同22.8%、28.2%、42.4%、36.8%)、「鳥インフルエンザ」(同17.9%、12.9%、28.8%、31.2%)などは顕著です。

表 1 . 不安防衛度

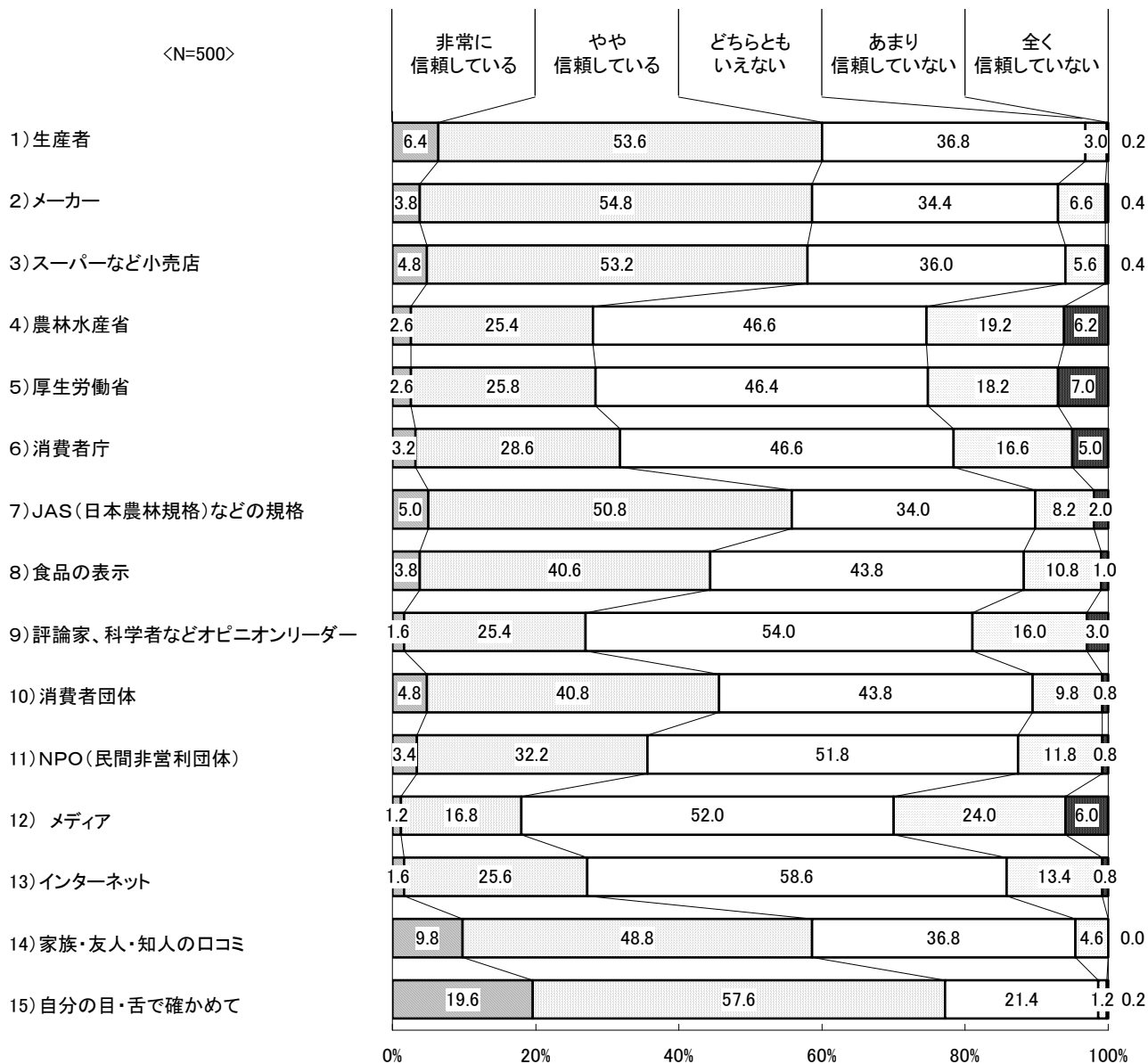
	<A>		< B/A >
	不安を感じる	利用を減らしたり、避けたり、表示を確認	不安防衛度
遺伝子組み換え作物	324名	216名	66.7%
食品添加物	337名	186名	55.2%
農薬	425名	208名	48.9%
BSE(狂牛病)	371名	160名	43.1%
食品表示の不十分	300名	118名	39.3%
外食食材の原産地	321名	123名	38.3%
賞味期限・消費期限の偽装	361名	137名	38.0%
食品の偽装	398名	111名	27.9%
飼料の抗生物質	323名	90名	27.9%
鳥インフルエンザ	351名	96名	27.4%
魚介類の水銀汚染	376名	102名	27.1%
ポストハーベスト	193名	51名	26.4%
化学物質の混入	349名	88名	25.2%
偽装表示	347名	83名	23.9%
環境汚染物質	352名	82名	23.3%
家庭における微生物による食中毒	250名	56名	22.4%
外食食材の使い回し	333名	73名	21.9%
家庭における衛生、温度管理	230名	49名	21.3%
製造・加工過程の微生物の繁殖	296名	58名	19.6%
流通過程の衛生、温度管理	225名	37名	16.4%
製造工程の衛生	301名	46名	15.3%
流通過程の微生物の繁殖	266名	38名	14.3%

なお、不安防衛度（不安に感じている人のうち、利用を減らしたり、避けたり、表示などで確認している人の割合）をみると、「遺伝子組み替え作物」（66.7%）が6割台で最も高率ですが、不安を感じながらも何も対処していないという人も少なくないようです。以下「食品添加物」（55.2%）、「農薬」（48.9%）、「BSE（狂牛病）」（43.1%）、「食品表示の不十分」（39.3%）、「外食食材の原産地」（38.3%）、「賞味期限・消費期限の偽装」（38.0%）などが上位にあげられています。「遺伝子組み替え作物」「食品添加物」「農薬」「BSE（狂牛病）」などは不安を感じる人が多いものの、表示や産地を確認することで、ある程度自己防衛できると考えられているようですが、本当に自己防衛できるのかどうかは問題がありそうです。

6. 品質・安全について、どこからの保証を信頼しているか

最も“信頼している”割合が高いのは『自分の目・舌で確かめて』(77. 2%)。以下『生産者』(60. 0%)、『家族・友人・知人の口コミ』(58. 6%)、『メーカー』(58. 6%)、『スーパーなど小売店』(58. 0%)、『JAS(日本農林規格)などの規格』(55. 8%)などが続く

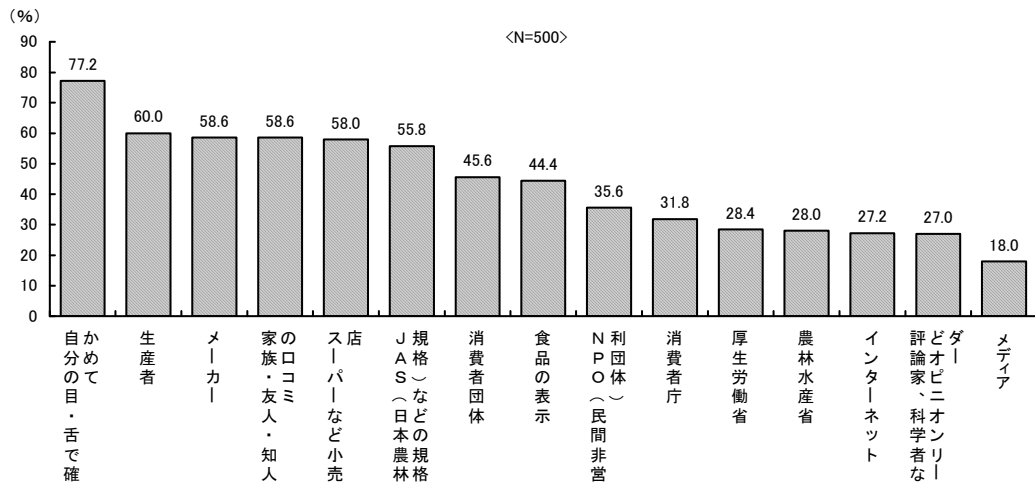
図 1. 「食品全般の品質・安全」について、どこからの保証に対して、どの程度信頼しているか



食品全般の品質・安全について、どこからの保証に対して、どの程度信頼しているか尋ねてみました。最も信頼しているのは『自分の目・舌で確かめて』で、約2割が「非常に信頼している」(19. 6%)と回答しており、「やや信頼している」(57. 6%)を合わせると、“信頼している”(77. 2%)という人は4人中3人強です。そのほか、“信頼している(非常に+やや)”の割合が高い順に『生産者』(60. 0%)、『家族・友人・知人の口コミ』(58. 6%)、『メーカー』(58. 6%)、『スーパーなど小売店』(58. 0%)、『JAS(日本農林規格)などの規格』(55. 8%)が小差で続き、以下『消費者団体』(45. 6%)、『食品の表示』(44. 4%)、『NPO(民間非営利団体)』(35. 6%)、『消費者庁』(31. 8%)などの順となっています。

図 2. 「食品全般の品質・安全」について、どこからの保証に対して、どの程度信頼しているか

<「信頼している（非常に+やや）」の割合>

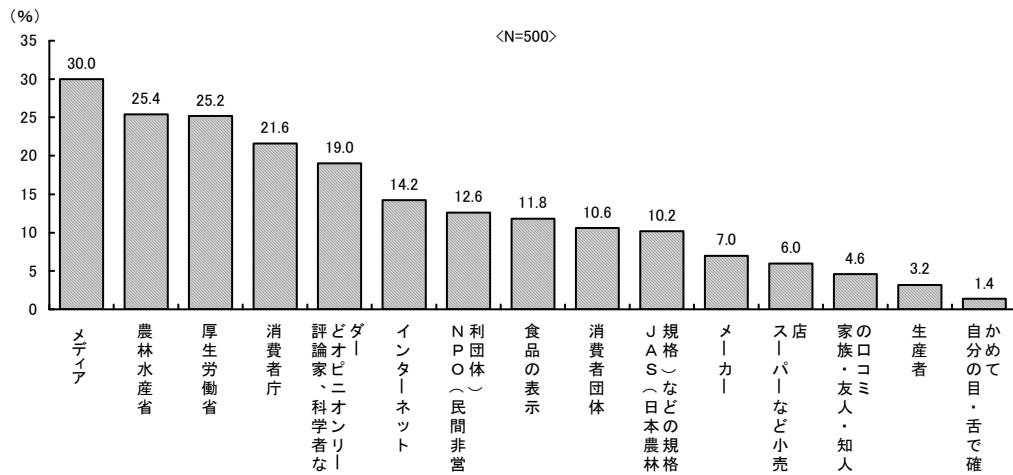


年齢	25～34歳 <n=125>	35～44歳 <n=125>	45～54歳 <n=125>	55歳以上 <n=125>	自分の目・舌で確かめて	生産者	メーカー	家族・友人・知人	スーパーなど小売	J規格（日本の農林規格）	消費者団体	食品の表示	NPO（民間非営利団体）	消費者庁	厚生労働省	農林水産省	インターネット	評論家、科学者などオピニオンリーダー	メディア
25～34歳 <n=125>	66.4	58.4	53.6	60.0	53.6	57.6	30.4	43.2	24.8	29.6	31.2	30.4	36.8	22.4	20.8				
35～44歳 <n=125>	76.8	62.4	59.2	63.2	53.6	48.0	44.8	43.2	36.0	28.0	25.6	24.8	25.6	32.0	22.4				
45～54歳 <n=125>	83.2	53.6	59.2	56.8	59.2	60.8	52.8	48.8	37.6	36.0	29.6	28.8	26.4	28.0	17.6				
55歳以上 <n=125>	82.4	65.6	62.4	54.4	65.6	56.8	54.4	42.4	44.0	33.6	27.2	28.0	20.0	25.6	11.2				

年齢別で“信頼している（非常に+やや）”の割合をみると、『25～34歳』は『インターネット』が他の年齢よりも高率で、『自分の目・舌で確かめて』『消費者団体』『NPO（民間非営利団体）』が低率です。

図 3. 「食品全般の品質・安全」について、どこからの保証に対して、どの程度信頼しているか

<「信頼していない（全く+あまり）」の割合>



年齢	25～34歳 <n=125>	35～44歳 <n=125>	45～54歳 <n=125>	55歳以上 <n=125>	メディア	農林水産省	厚生労働省	消費者庁	評論家、科学者などオピニオンリーダー	インターネット	NPO（民間非営利団体）	食品の表示	消費者団体	J規格（日本の農林規格）	メーカー	スーパーなど小売	家族・友人・知人	生産者	自分の目・舌で確かめて
25～34歳 <n=125>	28.8	20.8	22.4	18.4	13.6	16.0	10.4	12.0	10.4	8.8	8.0	2.4	3.2	3.2	2.4				
35～44歳 <n=125>	28.8	26.4	26.4	22.4	19.2	13.6	17.6	12.0	14.4	11.2	7.2	9.6	5.6	4.8	2.4				
45～54歳 <n=125>	30.4	25.6	24.0	21.6	20.8	12.0	9.6	9.6	7.2	9.6	4.8	8.0	4.0	1.6	-				
55歳以上 <n=125>	32.0	28.8	28.0	24.0	22.4	15.2	12.8	13.6	10.4	11.2	8.0	8.0	5.6	3.2	0.8				

“信頼していない（全く+あまり）”の割合をみると、いずれも3割以下ですが、トップは『メディア』（30.0%）で、次いで『農林水産省』（25.4%）、『厚生労働省』（25.2%）、『消費者庁』（21.6%）、『評論家、科学者などオピニオンリーダー』（19.0%）などが続いています。

年齢別でみると、上の年齢ほど『評論家、科学者などオピニオンリーダー』が信頼されていない割合として高めです。